

博士学位請求論文

「中世日本密教の形成と展開」研究概要書

大鹿眞央

本論の研究目的は、院政期から南北朝合一の頃(十一世紀後半から十四世紀末頃)を「中世」として定義し、当時の東台両密における教相、即ち教理内容の研究を中心に取り上げ、その解釈や思想の変遷を文献学的研究方法に基づいて解明することにある。

そもそも平安初期に空海(七七四～八三五)が打ち立てた東密の教学は、その後、撰関期にかけて主に事相(行軌作法の様相に関する研究)面を中心に展開したが、教相面に関してはさほど大きな進展を見せていないと言える。その一方、台密においては、円仁(七九四～八六四)・円珍(八一四～八九一)・安然(八四一～八八九)、一説九一五没)といった学僧が積極的に教相研究及び著作活動を行い、特に円珍と安然は、十住心思想を軸とする空海の教学に対して苛烈な批判を行った。

やがて、白河上皇による院政の開始と時を同じくして、東密の教相研究に大きな変化が現れる。祖師空海の著作に関する研究が開始されるとともに、台密からの論難に対する反駁がなされるようになるのである。

密厳院覚鑊(一〇九五～一一四三)の修学した京都仁和寺においても、東密における空海教学研究の先駆けとも言える南岳房濟暹(一〇二五～一一一五)や、仁和寺に伝法大会を復興した成就院寛助(一〇五七～一一二五)^註、また『印信謬譜』等を撰述して最澄(七六七～八二二)以来の台密の伝承に疑義を示した恵什(一一三五)^註といった碩学たちが研鑽を重ね、事相のみならず教相研究が隆盛の兆しを見せていた。また、台密からの論難に関しては、中川実範(??～一一四四)や小野信証(一〇八六?～一一四二)などが、安然への反駁を試みている。^註 こうした批判や反駁も含めて、東台両密における教相・事相の交渉が行われる中で、中世の東密教学は徐々に形成されていったのである。

このような時期に、仁和寺及び高野山で活躍した覚鑊の教学は、後代につながる問題意識の「萌芽」として瞠目すべき価値があると言える。覚鑊が取り上げる教相の問題点・疑問点は、後代の議論と比較すると未成熟な部分もあるが、後の鎌倉期から南北朝期における東密の学匠たちが提示した問題点・疑問点に通ずるものである。例えば、古義派の正智院道範(一一七八?～一二五二)や宥快(一二三四五～一四一六)、東寺の三宝の一人であ

る果宝（一三〇六〜一三六二）、さらに新義派の中性院頼瑜（一二二六〜一三〇四）や聖憲（一三〇七〜一三九二）へ与えた影響は少なくない。覚鑿による問題意識の萌芽を承けて、後代の碩学たちはそれらを顕在化し、論義や著作中で活発に論を展開していったのである。

こうした流れの中で、南北朝合一の時期に至るまでに、東密教学における重要な問題はあらかた議論し尽くされ、室町時代には各教説を取捨選択する時期へと移っていく。その中で幾つかの教説は主流の解答として周知されるようになり、その結果、新しい解釈は周困に容認され難くなっていった。しかし、覚鑿や道範たちが生きた時期は、僧侶一人一人が活発に自説を主張し、様々な歪みや新基軸を生み出していった、言わば「東密教学が形成されていく濫觴期」とも言うべき時期である。従って、覚鑿や道範といった諸学匠の教学を精査することは、東台両密の思想の変遷を究明する上で非常に有意義であるのみならず、現在では黙殺されてしまった、もしくは未だに認識されていない密教学上の問題点をあぶり出す糸口ともなり得るのである。

さて、中世密教学の教相研究は、機根論・教判論・教主義などの様々な分野で展開したが、行位論・成仏論において注目すべき新たな教説が初地即極説である。初地即極説とは「初地の悉地と究竟の仏果位とを同等に見る」といったものであり、初地位に円極自証の悟りを得るため、二地以上は果後の化他のために存在するといった教説である。

初地即極説は、機根論とも相俟って、鎌倉期以後の論義書や宗義決択書等で多く俎上に載せられ、後代の東密教学にも多大な影響を与えている。しかし、この教説は空海の教学から直接的に導き出されるものではなく、院政期から教相の研鑽が盛んになるにつれて、漸次にその色合いを濃くしていったものと考えられる。もちろん「発心即到」といった思想も、初期の頃より東密の通底として存在していたことは論を俟たないが、院政期までの行位論に関して言えば、仏果は妙覚位で得るものであり、あくまで十地を経ることが前提とされてきた。密教の行位論における「横」の観点、即ち平等の観点に立って当位をそのまま目的地（到達すべき位）と同等に見る解釈とは、仏果を得た後の「仏の観点」であり、そこに至るまでは、十地を経ることが必要とされてきたのである。

換言すれば、東密の教相における矛盾や齟齬に関して考究しようとする気運が高まってくるまで、「横」の思想における「当位」を「初地」に特定し、なおかつそのまま究竟の仏果と同等に見る「根拠」について、明確な議論や主張がなされなかったとも言えよう。現に、覚鑿を含めた院政期の東密の学匠たちの多くは初地即極説を採用していない。

しかし、教相研究の隆盛に伴って、『大日経疏』における初地を基調とした記述や、空海撰述と目されてきた『秘藏記』、『雜問答』等の記述を基址として、初地を重視する傾向が漸次強まっていた結果、初地に自性円満の仏果を得るといった特異な行位論が説かれるようになったのである。就中、初地即極説を基軸に据えて、自説を展開したのが禅林寺静遍（一一六六～一二二四）及び正智院道範である。

静遍・道範は『大毘盧遮那成仏神変加持経』（以下、『大日経』）・『大毘盧遮那成仏神变加持経疏』（以下、『大日経疏』）の三劫段の解釈、また『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経』（以下、『瑜祇経』）の第七品等の解釈に関しても、初地即極説を用いた特異な行位論・成仏論を主張している。そういった主張の源流は、醍醐寺実運（一一〇五～一一六〇）や宝生房教尋（一〇六九～一一四一）の著作にまで遡れるのであるが、後代への影響力の大きさとという点において静遍・道範の存在を看過することはできない。また、静遍・道範と言えば、理・智・事の三点説を用いて新たな教主義や仏身論を展開したことで知られているが、⁶ 三点説を用いた教説は、後代の宥快や頼瑜によって苛烈に批判されることになる。

後代の東密の学侶たちは、従来の教学と異なる特異な主張をする静遍・道範を批判しながらも、その影響を多分に受けている。その一端が『瑜祇経』の註疏類に見て取れる。頼瑜や聖憲といった根来の学匠は、静遍・道範の教説を批判しながらも、一部では黙認し、また一部では敢えて曲解して引用するなどして、その影響を色濃く示しているのである。

以上のような歴史の流れを踏まえつつ、本論で究明する主な内容は、大別すれば、①「第一部 覚鑿の教学における諸様相」、即ち浄土信仰解釈に限らない、覚鑿の教学における様々な特色についての考察、②「第二部 初地即極説をめぐって」、即ち初地即極説の要否をめぐる議論、またその源流についての考察、③「中世日本密教における『瑜祇経』解釈の受容と展開」、即ち東台両密における『瑜祇経』の解釈の交渉や変遷についての考察、以上の三点にまとめることができる。そこで、以下に各章の概要を略述する。

第一部 覚鑿の教学における諸様相

第一章では、覚鑿が妄執についてどのように捉えていたか、特に『大日経』三劫段における三妄執と根本無明の解釈に焦点を絞って考究した。その結果、覚鑿が伝法大会の談義において、三妄執と根本無明における問題の焦点を把握し、明確に論じていたことが判明した。また前九種住心と第十住心との間で様々に区別し、さらには自宗の十地と大日心王

位とで所断の惑を峻別している点は、覺鑊の妄執論の大きな特色と言える。

第二章では、覺鑊における除蓋障三昧と初地位の理解について考察した。その結果、覺鑊が除蓋障三昧を得たと宣言したことは、即ち真言門の初地位の境界に入ったことを意味していたことが判明した。そして、それは第八住心の極果にも通ずる境界でもあるはずなのであるが、覺鑊は「等覺位」という概念を用いて、前九種住心と第十住心とを峻別している。また、自宗内の行位で言えば、真言門の初地位は、究竟の妙覺位である大日心王位と明確に区別されるものであり、覺鑊が「初地即極」といった考えを意識していなかった、あるいは重視していなかったことが推測されるのである。

第三章においては、覺鑊の著作や覺鑊の講説を筆記した文献を基に、覺鑊が『大日経』三劫段を如何に解釈し、利用していたのかについて考究した。その結果、覺鑊は第八住心や第九住心に対する第十住心の優位を宣揚することに心を砕いていたことが判明した。実範や信証とほぼ同時期に生きた覺鑊においても、空海の教説を守りながらも、台密からの論難に反駁する様子が窺えるのである。

第四章においては、特に第九住心との関係を念頭に置きつつ、覺鑊の著作に見られる第八住心に関する教相判釈を検討した。その結果、覺鑊においても、第八・第九住心のどちらが深教であるかという議論は無視できない問題であったと考えられ、空海の教説を遵守するという結論は動かないにしても、第八・第九住心における次第の根拠が論じられていることが判明した。また、覺鑊は「吾が住心内に悟り極まらず、次の住心に悟り極まる。」という独自の教判論を展開し、漸機誘引や二乗作仏の所説を以て天台宗を低く見るという解釈を示す。このような解釈は、後代の古義派の論義にも伝わっていたのであり、八九浅深の議論における展開の一端がここにも見て取れるのである。

第二部 初地即極説をめぐって

第五章では、まず初地即極説が明確に主張されるようになった起点を検討した。また、初地即極説の揺籃期に位置する学匠である静遍や道範の初地即極説について考察を加えた。検討の結果、教尋撰述の可能性が高い『顕密差別問答鈔』こそが、初地即極説を密教の行位の基軸に据えた最初期の文献であろうと結論した。また、静遍は、重誉の行位論を柔軟に採り入れて「教門・実行」の区分や「有教無人」の思想を用いた初地即極説及び教判論を打ち出す様子が見て取れる。また「頓・漸・超」の三類における超機の概念に初地

即極説を応用し、新たな解釈を見せていることにも一目を要しよう。そして、こういった静遍の教説を道範が継承し、道範が使用した「初地即極」という語句を後代の学匠たちが用いて、多様な議論を展開するようになったのである。

第六章では、覺鑿・静遍・道範・宥範といった各時代の東密の学匠たちが、真言の初地と余教の極位との関係を如何に捉え、どのような教判論を展開してきたのかという点について考究した。検討の結果、覺鑿は真言と余教とが「無異」である一致点を第十住心真言の初法明道を得る階位、即ち初地に設定している。要するに、真言と余教との関係が焦点となる問題について、一致点を真言の初地に設定することで解消しようとしているのである。覺鑿が初地即極説を採用していないからこそ、「無異」の語句の会通として、第八・第九住心を第十住心真言の初地に該当させることが可能であったと考えられる。それに対して、静遍・道範は初地即極説を基軸に据えたことで真言の初地と余教の極位とを同等に扱えなくなったために、第八・第九住心を従頭入密の真言行者として認識し、これら二心を「迂廻」の真言行者と呼ぶといった特異な行位論を展開して、問題の解消を図ったのである。最後に、宥範は「殊異の菩薩」や「直行人真言の人」といった概念を用いて、『大日経疏』の文意が曖昧な部分を解説している。静遍・道範と宥範とは、真言行者の内に二種類の行者を設定するといった点において近似した概念でもって会通を図っている。しかし、両者の間には決定的な違いが存在する。それは、宥範が初地即極説を採用していないことである。宥範は真言の初地と頭教の極位とを明確に区別しながらも、初地と究竟の仏位とを同等には考えていない。覺鑿・静遍、道範、宥範の三種の教判論を比較してみると、院政期の覺鑿に比べて、鎌倉期以降の静遍・道範や宥範には余教をより厳しく峻別する方向へと変化している様子が見取れることが分かった。また、静遍・道範によって初地即極説が頭揚された後も、伊豆流教学においては必ずしも初地即極説を採用していなかったことが判明した。

第七章では、静遍・道範の宿善解釈について、道範における特異な思想の展開を説明するとともに、静遍の教説とその影響について考究した。その結果、道範は、宿善未熟の者（もしくは真言の当機でない者）は発心即到が不可能であるため、今生の未証以前の三密行も含めた全てが宿善と見なされると主張したことが判明した。その一方で、末世において三密が相応せずとも、不退転に修行すれば、宿善が純熟して今生もしくは余生に発心即到できるといふ。以上のような宿善解釈や、行者を直往・迂廻に二分するという思想は、師僧の静遍の教説を概ね受け継いだものであると言える。このように、静遍と道範が宿善

の範囲を拡大して今生の修力まで含めた意図は、「現在において発心即到できていない真言行人」が証得するためにはどうしたら良いのかという問題に解決を図ったものと考えられる。しかし、宿善にも顕密の分別があるという解釈は、現存する静遍の著作中には見られず、道範独自の展開である可能性が高い。そして、その解釈から言えば、直往の行者にとつての宿善とは何か、また「密教に値遇」する前に三密の宿善が存在し得るのかといった疑問点が生じる。こうした道範の教説に付随する疑問を解消できているかについては確証を得ないものの、『宗義決択集』では「真言に結縁する分の宿善に顕教も含めるべきか」と表現に含みを持たせながらも、道範の教説を採用しているのである。

第三部 中世日本密教における『瑜祇経』解釈の受容と展開

第八章では、東密における『瑜祇経』第七品・第八品に関する解釈の新たな展開について検討してきた。実運撰『瑜祇経秘決』において、第七品・第八品の解釈に初地即極説が導入され、後代の実賢・道範・静遍・頼瑜がそれを如何に受容・展開したのかについて検討した。その結果、初地即極説を論ずる上で広く認識されている「第二地以上は化他」という教説に関して、その源流を実運撰『瑜祇経秘決』にまで遡ることが可能であることが判明した。また、第二地解釈については、初地即極説の最初期に位置すると考えられる実運は、真言宗の位地を初地と第二地の二位のみに限定し、第三地以上の階梯を設定しないことが分かった。実賢・道範は実運の教説をほぼ踏襲しながらも、道範は独自の解釈を展開していた可能性も窺える。こうした瑜祇経解釈の伝承の中で、道範の師である静遍と、その静遍を苛烈に批判する頼瑜の流れを汲む聖憲とに、「自証円極の位である初地に至れば、第二地以上の智慧・功德をそこで全て獲得できるため、第二地以上の行は仏果後の方便に過ぎない。」という共通の主張があったことは非常に興味深い。また、頼瑜は『瑜祇経秘決』・『瑜祇経口決』の文章を度々引用するが、初地即極説に関しては意図的に避けたいように考えられ、『瑜祇経』解釈における多様性が見て取れる。

第九章では、中世の『瑜祇経』の註疏類における第七品及び第十品に関する箇所を中心に、東台両密における『瑜祇経』解釈の交渉について考究した。検討の結果、安然による自性障の特異な解釈は、後代の東密にも大きく影響を与えていることが判明した。その一方で、現存する東密の『瑜祇経』註疏において、新たな解釈の展開を見せた最初期の学匠である実運の教説には、東密の独自性を打ち出そうとする意志を読み取ることができる。

さらに、伊豆流の宥範には、安然の教説を積極的に受容する様子が見て取れる。第八章と同じく、ここにも『瑜祇経』解釈における東密教学の多様性が表れていると言えよう。

本論の概要は上記の通りである。なお、本論では、院政期から南北朝合一の頃（十一世紀後半から十四世紀末頃）を「中世」として定義し、当時の東台両密における教相、即ち教理内容を研究射程としている。ただし、後代との関連性を言及する場合には、室町期・江戸期の学侶の思想にも考察対象を拡げていることを付言しておく。

本論では、これまで研究が行き届かなかった領域にも焦点を当てながら、「密教思想史」の把握という観点に基づいて、中世の東台両密における思想の変遷・展開について多角的に考究した。

以上

提出日 二〇一九年一月三〇日

* 寛助による仁和寺での伝法大会復興に関しては、榎田良洪『寛鑊の研究』第一章「寛鑊と寛助の関係」（吉川弘文館、一九七五、五四頁～五五頁）において詳説されている。

* 仁和寺恵什の疑義に対して、比叡山の葉雋は『天台宗遮那業破邪弁正記』を撰して反駁をしている。詳細は三崎良周『台密の研究』第七章「蘇悉地の源流と展開」（創文社、一九八八、五三七頁及び六四〇頁～六四三頁）と同『台密の理論と実践』「台密の蘇悉地法をめぐる諸問題」（創文社、一九九四、九四頁～九七頁）を参照。

♫ 円珍・安然による空海への論難を始めとした東台両密の教判論争に関しては、多数の先行研究がある。主なものを挙げれば、獅子王円信「台東両密の教判史上に於ける論争」（『密教研究』三九、一九三〇／『叡山仏教研究』、永田文昌堂、一九七四）、神林隆浄「大師の判教に就て」（『密教研究』五一、一九三三）、福田堯穎『天台学概論』第二卷第六章「台東両密に於ける教判の論争」（三省堂出版、一九五四）、那須政隆『那須政隆著作全集』第一卷第三章「真言門への深般若心」（法蔵館、一九九七）、大久保良峻『台密教学の研究』第五章「台密教判の問題点」（法蔵館、二〇〇四）、橋本文子「東密における『教時義』受容の一考察―特に「十住心の五失」について―」（『密教文化』二一七、二〇〇

六)等がある。

* 静遍・道範による理・智・事の三点説を用いた教主義については、中村正文「禅林寺静遍の提唱した教学について―特に教主論を中心として―」(高野山大学論叢二六、一九九一)等を参照。また、静遍・道範による三点説を用いた仏身論については、熊田順正「静遍『統撰択文義要鈔』における仏身論」(『東洋学研究』四二、二〇〇五)や同「静遍教学の特異性について―諸師の批判を通して―」(『東洋学研究』四五、二〇〇八)を参照。